

## 鹿物語

住山の八幡さまの片隅に、やさしいお顔の子安地蔵さまがお立ちになつとつてんや。このお地蔵さんはな、もともとは母鹿の供養と、子鹿の成長を願うて建てられたそうや。それにはな、こんなお話があるんや。

もう三百年ほど昔のことで、丹波の国の住山の郷、白髪岳の麓の鰐谷に与作という人が一人で暮らしとつたんやて。

家は小そうて、屋根は杉皮で葺いてあつたそうや。与作は畑を耕したり、時々狩りをして暮らしとつたつたそうや。

そんなある日、梅雨もようよう明けようかとする頃のことや。与作は誰に言うでもなしに、

「ああー、今日はほんまによう晴れて、気持ちが良い日和やな。久しぶりに狩りにでも出よかいな」

と言つて、鉄砲を持って山刀を腰紐にはさみこみ、山道を楽々と登りはじめたんや。

ちよつと行きよつたら、鰐谷川の川向こうの岩間で、山茶の陰にちらちらと見えるものがある。よう見たら、二頭の鹿のようや。仲良うに木の芽を食べているところを見たら夫婦の鹿らしいのや。

「あーっ しめたっ」

小さな声でつぶやき、与作は慣れた手つきで鉄

砲を構えたんやて。

鹿にとつては一大事なんやけど、鹿はちよつとも気が付かへん。与作は狙いを定めて、「ドスーン」

銃声は谷間にひびき渡つたそうや。

この弾は、かわいそうに雌鹿に命中したんや。

雌鹿は、苦しいて苦しいてのたうちまわつて、胸からは血が滴り落ちとつたそうや。

そのうちに段々よう動かんようになってしもたんやけど、死ぬ前のものすごい苦しみのなかから、最後の力を振り絞つて、悲しそうに一声啼いたそうや。

その時や。雌鹿の体の中から一頭の子鹿が生まれたんや。雌鹿は、生まれた自分の子鹿を見守りながら、これから先を心配しつつ息を引き取つたそうや。

雌鹿は励ますために一声強うに啼いたけど、雌鹿には、その声を聞き取る力はもうなかつたんやて…。

与作は、この様子を物陰で見とつたんやけど、申しわけのうて切のうて、三匹の鹿に近づこうとしたんやけど雌鹿は跳びつかんばかりに与作を近づけへんのや…。

与作は膝をついて、両手を合わせて、  
「ああー、かわいそうに、むごいことをしてしもた…。すまんすまん。ごめんしてや。せめてもの詫びに母鹿を弔わせてもらうさかい」  
そう言うて窪みに穴を掘つて、お墓を造つて弔

いをしたそうや。そいで、

「わしはもう鉄砲は持たへん。猟師はやめた。母鹿殿、この子鹿はどんなことしても、大事に育てるさかい成仏してや。父鹿殿、ちよつとの間預かつて行くけど、心配せんといてや。大きいうなつたらここへ返すさかいなあー」

と与作は子鹿を小脇に抱えて家に戻つたんやて。与作は、自分が犯した殺生を悔やんで、撃ち倒した母鹿を供養し、子鹿の成長を願うて、一心に真心を込めて石の子安地蔵さまを彫り、鹿の墓場におまつりしたんやて。

連れ帰つた子鹿には、木の芽を砕いて食べさせたりして大事に育てた。そのかいがあつて、日ごとに大きく、成長して行つたそうや。

子鹿が立派に育つたので父鹿のもとに帰してやつたんや。三ヶ月ほど経つたある日、お地蔵さまの前に元気な子鹿を連れた雄鹿がいたそうや。亡くなった母鹿にいろいろと話したり、報告しとつたんかも知れへんな。

そんな様子を、涙を流しながら見守る与作の姿があつたんやけど誰も気がつかんかった。たぶん、子安地蔵さまだけはご存じやつたと思うけど…。

与作が造つたこの子安地蔵をおまつりしたといわれる所を、今も地蔵谷と呼んでいる。また、この子安地蔵は、後に住山の八幡神社に移されたともいわれている。